

町史だより

西原のことばとその①

琉球方言ミニ知識

沖縄では、三月から四月の間をうりずん(古語・農作物の植え付けにほどよい雨がふる季節)といえます。これからだんだんと暖かくなり、緑が鮮やかに映える若夏がやってきます。

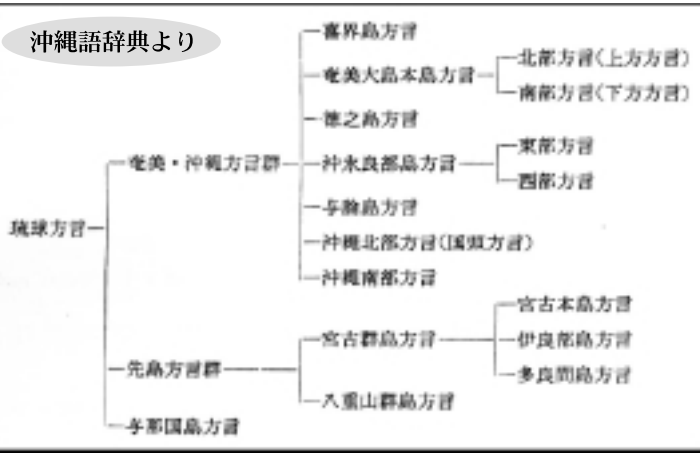
さて、昨年度は各字でおこなわれる年中行事を紹介しました。今年度の「町史だより」は、年中行事の報告を継続しつつ、人々が会話に使う「ことば」特に「方言」を取り上げてみたいと思います。

町史係では、平成八年度から『西原町史』第九巻 資料編八「言語編」の編



安室での方言調査の様子(2002.6.12)

沖縄語辞典より



集作業をおこなっています。町内各字の先輩方から人体・道具・季節・あいさつなど、多くの方言を採録しています。(上写真をそれらを聞き比べると、イントネーションなどの違いを感じることができず。特に棚原や我謝は「棚原ムニ」「我謝ムニ」などといわれ、特徴あるものいいをするといわれています。日本語は「アイウエオ」という母音があるのに対して、沖縄で使われている琉球方言には「アイウ」の三音しかありませんが、日本語の古い形を残している例もみられます。

沖縄はシマグニ(島国)であるがゆえ、

多くの種類の方言があります。(上図参照) 沖縄南部方言の中でも首里に近いということもあって、西原の方言は首里方言に似ています。

昭和十五年(一九四〇)、沖縄県は標準語励行運動を実施しました。県民の標準語能力が劣っているため、県外で誤解や不利益をうけているという理由からはじめられました。

各学校では、子供たちが方言を使うと、首から「方言札」と書かれた木札を下げられ、方言を使っている生徒を見つけて手渡していくという決まりがありました。強制や禁止によってきびしく押し進められたため、方言蔑視につながり、子供たちの発表意識を失わせる結果にもなっていました。

その頃、来県していた日本民芸協会の柳宗悦(やなぎむねよし)は、県当局の運動を批判しました。その内容は、「県民に屈辱感を与え、地方語の価値を否定している」とし、郷土文化の再認識を求めました。しかし、県当局は標準語励行が県民を繁栄に導く唯一の道であると主張しました。こうして、柳らは県当局と二年間にも及ぶ「方言論争」を巻き起こしました。

これらの出来事を鮮明に記憶している方もいらっしゃるのではないのでしょうか。現在では、琉球方言が見直され、音

楽や観光、町おこしなど各分野で広く活用されています。

西原町のインターネットホームページ「にしはらを知ろう」では、町内各字の動植物名の方言を実際に聞くことができます。ぜひ、二度ホームページにアクセスしてみてください。各字の方言を聞き比べることができますよ。

※琉球語・沖縄語・沖縄方言などとも呼ばれています

参考文献

- 『沖縄語辞典』国立国語研究所編
- 『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社編
- 『ひとことウチナーグチ』沖縄文化社編

◆◆◆お知らせ◆◆◆

『西原町史』販売について
 これまで西原町立図書館で販売していた『西原町史』は、教育委員会生涯学習課(役場第2庁舎)でもおもとめになれます。